

育友会主任教授・法学部教授

庄 菊博

しょうきくひろ
専修大学大学院法学研究
科民法専攻博士課程単
位取得退学。法学部助手、
専任講師、助教授を経て
教授。専攻は民法。主な
著書は『抵当証券制度の
課題』(単著)、『新しい金融
不動産の証券化』(共編
著)。埼玉県出身69歳。
趣味はテニス、散歩、料理。



学生との通信手段

自宅の電話のベルが鳴る。妻が受話器を取り、「学生の〇〇さんからの電話ですよ！」と私に声をかける。受話器を通して、いつもの学生の声が伝わる。通話を終えて受話器を置くと、妻からの一言が入る。「今の学生さんは自分から名前を名乗らない」、「声が小さくはっきりしていない」など。このような電話後の内々の会話は、かつて、私自身が学生の頃、ゼミの先生に電話したときにも先生宅で交わされていたのかも知れない。

しかし、いつ頃からであろうか。学生が自宅はもとより、携帯に電話してくることが少なくなった。ゼミの学生からは全くないといっても過言ではない。ときたま電話があるのは私が部長をしている体育会の学生からである。受話器からは、「失礼します！

専修大学体育会△△部の〇〇です」の声が流れる。先方からの電話が少なければ、こちらからの電話連絡も少なくなる。それは自宅での電話料金や大学研究室での電話料金にも当てはまる。大学では、研究室で使用した一年間の外線電話料金が通知されることになっているが、その金額の想像以上に少ないことに驚く。また、今春の地下鉄車内での光景が忘れられない。二人の新入社員とおぼしき若者の会話の様子では、現在、電話での応答について研修を受けているらしい。どうやら、受話器付き電話を操作したのは初めて、プッシュホンのダイヤルも初めての経験らしい。現在の若者にとって、私たち親の世代が慣れ親しんだ受話器付き電話機は「未知との遭遇」であるらしい。

この原因は通信手段が電話から電子メールに変わ

ったことにあるようだ。私自身、日々、幾度もパソコンのメール画面を開いて受信メールを確認し、メールを送信している。電子メールは私の日常生活に必要不可欠な存在になっている。相手が食事中であっても、入浴中であっても迷惑をかけない。急ぎのメール連絡ならば携帯メールを利用すれば良いのである。

しかし、最近では、少なくとも学生との通信手段として、電子メールが万能の救世主ではなくなってきた。一つに、LINEのような新たなSNSの登場である。最近も、ゼミの直前、資料を研究室に取りに来るよう学生にメールを送信したが音沙汰がない。ゼミ室に赴いて、このことを質すと、私からのメールに気づいていなかった。なんと、スマホの着信音やバイブレーションの設定がLINEのみになっていたのであった。私からの指摘を受けた学生は、スマホを操作し直し、ようやく私からのメールに気づいたのであった。私はLINEを利用していないために、学生から私へのメール連絡は電子メールにならざるを得ない。学生にとって、ある意味、電子メールは外向きの通信手段であるらしい。二つに、電子メールの記載内容についてである。メールで学生に種々の指示をしても、返信メールは「了解」または「了解しました」で済まされてしまうことも多い。一体、どの項目をどのように了解したのであるだろうか。再度、確認のためのメールを送信する羽目となる。

通信手段は日進月歩で進化している。今や、通信手段は便利で時や場所を選ばなくなった。しかし、それは道具に過ぎない。そして、道具を使用するのは私たち自身である。どのような道具をどのように使用するのか。それが試されているともいえる。